

今月のことば

亡き人は
一大事を
問えと
無言の催促

〔「直枉カレンダー」より〕

龍谷大学非常勤講師

こいけひであき
小池秀章

次のようなお話が伝わっています。

『昔、キサー・ゴータミーという若い女性がいました。ゴータミーは、結婚して子どもを授かったのですが、その子どもが幼くして突然死んでしまったのです。ゴータミーは嘆き悲しみ、死んだ子どもを抱いて、「私の子どもを助ける薬を知っている人はありませんか」と、たずね歩きました。一人の賢者の勧めで、お釈迦さまの所に行ったゴータミーは、「どうかこの子を助ける薬をください」と頼みました。すると、お釈迦さまは、「わかりました。それでは、今まで誰も死んだ人のいない家から、芥子の実をもらってきてください」と言われました。

ゴータミーは喜んで、家々をたずね歩きました。ところが、芥子の実はどこの家にもあるのですが、今まで誰も死んだ人のいない家が見つからなかったのです。疲れ果てたゴータミーは、やがて大切な事に気づかされました。「今まで誰も死んだ人のいない家などない」とつまり、「人は、生まれたからには必ず死ななければならない」ということを。そして、ゴータミーはお釈迦さまの弟子になりました。

「人は生まれたからには、必ず死ななければならない」ということは、頭では分かっていますが、本当の意味で受け容れることは難しいことです。しかし、身近な人が亡くなった時、嫌でも死(生)の問題に直面します。それはとても厳しいご催促だと言わねばなりません。亡くなられた方からの大切なメッセージを、しっかりと受け止めて生きるところに、本当の人生が開けてくるのです。

合掌